

令和 3 年 6 月 16 日現在

機関番号：24402

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23079

研究課題名(和文)13世紀アラスの演劇：中世都市共同体における演劇の成立とその機能について

研究課題名(英文) Theater in 13th Century Arras: The Formation and Function of Theatre in a Medieval Urban Community

研究代表者

片山 幹生 (KATAYAMA, Mikio)

大阪市立大学・大学院文学研究科・研究員

研究者番号：50318739

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：北フランスの都市的環境の中で形成され、発展してきたフランス語演劇の特性とその社会的機能を、この時期のアラスで制作・上演された演劇作品の分析を通して明らかにした。13世紀フランス語演劇は、アラスの都市共同体の中核を形成していたブルジョワたちと彼らの庇護のもと活動していたジョングールという職業的芸人のもとで花開いた。研究では主にアダン・ド・ラ・アルの『葉陰の劇』のタイトルの多義性に着目し、この多義性を読み解くことによって作品の背景にある都市共同体のあり方と共同体における演劇作品創造の意義を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は13世紀のアラスで制作・上演された演劇作品を主なコーパスにしている。テキスト本文の分析のみならず、作品タイトルの表記、ト書き的記述などのパラ・テキストの要素にも着目することによって中世フランスの都市文化のなかで演劇特有の書法の確立された過程を論証し、中世都市共同体における演劇テキスト創造の意義を、文献学研究成果を踏まえた読解によって考察したことに、本研究の学術的・社会的意義はある。

研究成果の概要(英文)：This study clarifies the characteristics and social functions of French vernacular theater of Middle Ages, which was formed and developed in the urban environment of northern France, through an analysis of the theatrical productions produced and performed in Arras during this period. In the 13th century, French theater flourished under the patronage of the bourgeoisie and the professional entertainers of medieval cities. In my research, I focused mainly on "Le Jeu de la feuille" by Adan de la Halle, and by reading this polysemy of this play, I clarified the nature of the urban culture that I found behind the play and the significance of the creation of theatrical works in the medieval community.

研究分野：フランス演劇

キーワード：中世演劇 フランス演劇 アラス

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の二つの背景のもと構想された。一つは演劇言語の特性について揺籃期のフランス語演劇作品の分析を通して考察すること。もう一つはフランスにおいて演劇というジャンルが中世都市という環境の中から生まれた理由を考察することである。

13世紀のアラスを中心とする北フランスの都市的環境のなかで製作・上演されたフランス語演劇作品は演劇史のなかではその直接の先祖も後継者も持たない孤立した地域限定的な文化現象だ。口頭によるパフォーマンスで伝えられてきた中世文芸では、あらゆるジャンルのテキストが多かれ少なかれ演劇性を帯びていたがゆえに、語り物文芸と演劇ジャンルの区別は曖昧であり、それは叙事詩と劇詩をはっきり区別したアリステレスの考え方や対話体のみで構成される近代演劇のあり方と相容れないものだった。しかし語り物文芸と演劇のあいだには果たして決定的な断絶は存在するのだろうか。13世紀の演劇作品には、短い「語り」の地のテキストが挿入されていることが多い。叙事詩的な語り、抒情詩的な歌、そして演劇的なダイアログの間を行き来する流動性は、13世紀アラスの演劇テキストの特徴と言えるだろう。揺籃期のフランス語演劇テキストの分析を通して、この時代に演劇がジャンルとして自律していく過程を確認することがこの研究の背景の一つである。

この研究のもう一つの背景は、13世紀アラスの都市社会における文芸の役割は何かという問いだ。この領域については、ロジェ・ベルジェの実証的な方法に基づく文学研究のほか、キャロル・サイムズがコミュニティ・シアターとしての中世演劇のあり方についてハーバースの公共圏の概念をベースにした重要な論考をいくつか発表している。本研究は、これらの文献学的テキスト読解の伝統と中世都市史研究の成果に基づいた中世フランス演劇史の記述を目指すものになっている。

### 2. 研究の目的

本研究は、揺籃期のフランス語演劇の特徴とその形成と発展の過程を明らかにし、中世都市のコミュニティの中で演劇活動に託されていた役割について考察することを目的としている。研究の主なコーパスとなるのはアラス及びその周辺地域出身の作家によって書かれたフランス語演劇作品である。

13世紀の演劇作品は、単独のジョングルールによって朗唱されていた既存の語り物ジャンルを、複数の俳優によって演じられる演劇形式に書き換えることで成立している。本研究のコーパスとなるテキストは、それぞれ語り物文芸と演劇のあいだにある様々な段階を示している点で興味深い。13世紀の演劇テキストは、語り物文芸と演劇ジャンルの親近性を示していると同時に中世のテキストの流動的性格を示す興味深い作例となっている。これらの演劇作品を記録した写本には、この時代の語り物文芸を代表するジャンルであるファブリオや宮廷風物語も収録されていて、これらの語り物文芸の文体や詩法は演劇作品と共通点も多い。本研究では13世紀アラス出身の作家によって書かれ、様々なレベルの演劇性を有する文芸テキストの分析を通して揺籃期のフランス語演劇のテキストの特質を明らかにしていく。

現存する初期フランス語演劇の大半が制作・上演された13世紀の北フランスの都市アラスでは、司教、封建領主、修道院、富裕な町人によって構成された市参事会などの複数の権力が拮抗し、聖俗・新旧の様々な価値観が混在していた。中世フランス語演劇は、こうした複合的な社会状況のもと誕生し、様々な欲望がうごめく活気ある都市の現実の中で発展していった。そこにはジョングルールなどの職業的芸人、そして上演の費用を援助するブルジョワたちの組織(市参事会や信心会、ピュイ)など、演劇の成立に必要な要素がそろっていた。町の広場で上演され、様々な職能を持つ人間の協同作業が必要とされる演劇の上演は、都市の住人のアイデンティティの確立、共同体意識の自覚の装置として機能していたと考えられる。テキスト本文の分析のみならず、演劇写本のレイアウト、作品タイトルの表記、ト書き的記述などのパラ・テキスト的要素にも着目することで、中世フランス語演劇における演劇特有の書法の確立を確認し、演劇がこの時代の都市文化のなかで果たした役割を明らかにすることも本研究の目的となっている。

### 3. 研究の方法

本研究でテキスト分析の対象となる作品は、ジャン・ボデル『聖ニコラ劇』(13世紀初頭) 作者不詳『盲人と少年』(13世紀後半) 作者不詳『アラスのクルトワ』(13世紀後半) アダン・ド・ラ・アルの『葉陰の劇』(1270年頃)と『ロバンとマリオンの劇』(1282年頃) 作者不詳『巡礼者の劇』(13世紀末)という6編の演劇作品のほか、これらの演劇作品と同時代にピカルディ方言で書かれたファブリオ(韻文小話)そして宮廷風物語などの語り物である。今回の2年の研究期間ではこれら作品のなかから特にジャン・ボデルの『聖ニコラ劇』とアダン・ド・ラ・アルの『葉陰の劇』の翻訳と読解を集中的に進めた。

研究期間の初年度は、2019年12月と2020年2月にはフランスに出張し、パリ国立図書館および古文書研究機関である文献歴史研究所に赴き、この2作品を所収するfr.25566写本現物およびマイクロ資料、写本の記録を参照し、読解作業の過程で不明確だった箇所を、既存の校訂本の

記述と照らし合わせてチェックした。さらに写本のレイアウトや見出しなどパラ・テキストの状態を確認した。パラ・テキストについては、演劇作品だけでなく、同じ25566写本に記録されている語り物や叙情詩との比較も行い、演劇ジャンルの特有のパラ・テキストのありかたを探った。

2年目は『葉陰の劇』を記録する写本に記されたタイトルに着目し、タイトルに含まれる語の用例をTobler-Lommatzsch、Godefroy、FEWなどの主要な古仏語辞書や語源辞書からピックアップし、『葉陰の劇』の内容に関わりのある用例について原典を参照して確認作業を行った。アラスの都市史についての研究や資料およびVan Genepによるフランスの民俗・風習の記録等も参照し、当時の都市環境におけるこの作品、およびアラスの演劇作品の役割について考察した。

#### 4. 研究成果

初年度の研究成果としては、ラテン語の初期典礼劇の文体分析と劇作法の考察についての論文をまず挙げるができる。この研究課題の主な対象は13世紀アラスで製作・上演されたフランス語劇なので、修道院で聖職者たちによって上演されたラテン語初期典礼劇についての考察は、当研究課題の副次的な成果となる。しかし13世紀アラスで作られた演劇作品のなかで最も古い作品であるジャン・ポデルの『聖ニコラ劇』は、その題材と形式に、あきらかにラテン語歌唱劇である典礼劇の影響が見られ、初期フランス語演劇の劇的文体の創造の過程を考察するうえで、典礼劇のテキストを丁寧に読み込むことでいくつかの重要な示唆を得ることができた。典礼劇と13世紀アラスの演劇のドラマトゥルギーの比較対照により、中世フランスにおける俗語による演劇テキストの書記法の変遷と演劇的文体の特徴をより明確に把握することができた。また演劇史の書籍にある抜粋や解説を通してしか接していなかった典礼劇のテキストを精読したことで、これまで十分に認識していなかった典礼劇の演劇性の豊かさを確認することができたという収穫があった。初年度の研究成果は、片山幹生「典礼から演劇へ：典礼劇の言葉と音楽」、『Études Françaises』第27号、2020年、44-58頁に発表している。

二年目は中世フランス演劇についての講演を二回行い、論文を一本執筆した。一つ目の講演は岸井大輔企画PLAYと日仏演劇協会との共催のオンライン講演《リプレイ》vol. 17(2020年8月19日)での講演「中世演劇は存在するのか？「遊び(jeu/play)」としての中世フランス演劇」である。この講演では「遊び」《jeu》という語彙をキ・ワードに、中世演劇は本質的に共同体のメンバーのための、共同体のメンバーによるローカルな演劇活動であったことを論証した。《jeu》は中世フランス語で、複数の人物によって演じられる演劇ジャンルを示す。ジャンル名称としての《jeu》は、演劇の遊戯的側面のみならず、集団的側面を強調するものになっている。ジャンル名称としての《jeu》の初期の用例のほとんどは、13世紀アラス出身の詩人たちの演劇作品に関わるものであり、当時の演劇上演と都市共同体の祝祭との結びつきを示している。この講演では遊戯性と共同体性を切り口に、近代以降の演劇とは異なる中世演劇のありかたを示すことで、「演劇とはなにか」という根源的な問いに迫った。

二つ目の講演は、日仏演劇協会主催で2020年10月31日(土)にオンラインで実施された。「西欧演劇のあけぼの 中世典礼劇のドラマトゥルギーと音楽について」というタイトルで、宗教儀式と音楽と強く結びついた中世典礼劇の劇作術の特徴とその限界について解説し、ラテン語と音楽からの別離によって自律的な演劇ジャンル特有の語法が可能になったことを示した。この講演では初期典礼劇の原型となる対話体トロプスのテキストとそのテキストにつけられた音楽の分析を通して、典礼における言葉と音楽、身振りを土台とする典礼劇が、修道院や教会の聖職者によって、聖職者のために上演されていたある種の共同体演劇であることを論証した。

『Études françaises』第28号(2021年3月) p. 1-19に発表した論文「タイトルにみる『葉陰の劇』の重層性」は、当研究課題の集大成となる内容になっている。1276年にアラスで上演されたと考えられているアダン・ド・ラルの『葉陰の劇』*Jeu de la Feuillée*のタイトルは、作品全編を記載している唯一の写本であるパリ国立図書館 BnF fr. 25566 写本の *explicit* の記述、《Explicit li jeux de le feuillie》に由来する。通例、中世の文学作品の場合、作品の終わりを示す *explicit* の記述、作品の冒頭の語句である *incipit*、テキスト本文の前に付けられた見出し (*rubrique*) のいずれかを作品を同定するタイトルとする場合が多い。1828年の最初の刊本以来、大半の研究者はこの作品の呼称として、25566 写本の *explicit* の記述から取られた *Jeu de la Feuillée* を採用し、それが定着しているが、この写本には本文テキストの前に、*Li jus Adan* 「アダンの劇」という見出しも記載されている。この二つの「タイトル」の記述に作者であるアダン・ド・ラ・アル自身が関与している可能性は低いですが、この二つの表題は作品を書いた写字生および同時代の人間の作品受容のあり方を示す手がかりであることは確かである。この論考では『葉陰の劇』の写字生によって書き加えられた二つの「タイトル」の解釈の可能性を示すことで、この作品の重層性を明らかにした。

まずフランス語で書かれた中世の演劇作品の名称として用いられた《jeu》という語の多義性を、このジャンルの作品の題材と構成と関連づけて考察し、次いで写本でテキスト本文の前に記されている *Li jus Adan* 「アダンの劇」という見出しが示しうる意味を検証した。パリへの留学を冒頭で宣言しながら、結局はこの町の居酒屋に仲間たちと留まり続ける作品の作者であり、この劇の登場人物のひとりでもあるアダンの存在は、この作品の主要なモチーフのひとつであることは明らかだ。1099行の作品中、アダンの台詞は168行を占め、他の登場人物の台詞の量を圧倒している。《*Li jus Adan*》を「アダンについての劇」とする解釈は、タイトルに求めら

れる役割とタイトルと作品内容との関わりを考えると妥当なものであると言える。この作品の校訂・翻訳者であり、『葉陰の劇』について多数の論考を発表したジャン・デュフルネは、劇のなかで運命に翻弄される無力な人間であるアダんに、聖書のアダムも重ね合わせ、写字生は《Li jus Adan》という見出しによって作品の作者、劇中の登場人物、一般的な人間という三つの意味を表現したのではないかという解釈を提示している。

最後に現代の大半の研究者がこの作品のタイトルとして採用する 25566 写本の *explicit* にある《li jeux de le fuellie》の多義性について検討した。「葉陰」と訳されている《feuillée》は、現代フランス語ではほぼ使われなくなってしまった語だが、中世においてはさまざまな意味を持っていた。中世フランス語の辞書を参照してみると、TL には「葉のついた枝でできた小屋」《Laubhütte》、「葉の茂った枝」《belaubter Ast》、ゴドフロワには「葉の茂った枝；葉叢」《feuillage》、「葉のついた小枝で飾られた場所，葉のついた小枝で作られた仮小屋」《Lieu décoré de feuillage, barque en feuillage, loge construite avec des branches d'arbres》、「木の枝で建てられた小屋」《cabane de feuillage》等の語義が記されている。これらの辞書に掲載されている用例から見ると、《feuillée》は中世では葉のついたままの枝で作られた質素な仮小屋を示すことが多かったことがわかる。『葉陰の劇』が書かれ、上演されたのとほぼ同時期の 1285 年の十月はじめに行われた大規模な騎馬槍試合の記録であるジャック・ブルテルの『ショーバンスーの騎馬槍試合』の中には、宮廷での饗宴の描写の場面で《feuillée》の語が登場する。この《feuillée》は、校訂者のモーリス・デルブイユの用語解では「樹木のトンネル、つる草などをはわせた東屋」《berceaux, tonnelle》となっている。

《feuillée》にはこれまで挙げた意味以外に、当時のアラス特有の意味があったことを複数の研究者が指摘している。十三世紀のアラスでは聖霊降誕祭（復活祭のあとの第七日曜日）と聖母マリア被昇天の祝日（8/15）の期間、アラスの商業地域の中心にあるプティ・マルシェ広場に、アラスのノートルダム大聖堂に伝わる聖母マリアの聖遺物を納めた聖遺物匣《fiertre》が展示されることになっていた。この聖遺物匣は緑の葉のついた枝で作られた《feuillée》の下に安置されていた。作品のなかでは、《feuillée》自体は明示されていないものの、ノートルダム大聖堂の聖遺物匣《fiertre》の存在については言及されている。

また当時のアラスでは居酒屋では、葡萄酒やビールなどを供することを公的に許可された証として扉に「青葉のついた枝で作った輪」《fuellie》を掲げることが義務づけられていた。『葉陰の劇』の 875 行目以下は、居酒屋で繰り広げられる。台詞のなかでは《feuillée》はあえて発話されないが、その場が居酒屋であることを観客に示すために舞台上には《feuillée》が掲げられていたであろう。民俗学者の A. ヴァン・ゲネップが報告する五月祭の風習のいくつかは、『葉陰の劇』の中盤の 285 行を占めるアラスの広場に年に一度降り立つ妖精たちのエピソードを想起させるものだ。中世劇研究者のミシェル・ルースは五月祭の風習と作品の世界を結びつけ、そこから作品全体の解釈につながる興味深い仮説を提示している。

《feuillée》という語自体は作中では一度も発話されることはないとはいえ、《feuillée》は劇中で展開するエピソードに合わせ、恋人たちが逢瀬を楽しむ緑陰、聖アケールの聖遺物の展示場所、妖精たちを迎える東屋、居酒屋の看板、ノートルダム大聖堂の聖母マリアの聖遺物匣を守る東屋とその役割を変えながら、劇の最初から最後まで舞台の上に存在していたのである。多様なエピソードの集成となっている作品全体を象徴する要素として、《feuillée》ほどこの作品のタイトルにふさわしい語はないだろう。

最後に写本の《fuellie》を「狂気」《folie》と読む解釈の可能性についても考察した。「葉陰」《feuillée》が劇中のエピソードが展開する様々な場を象徴的・視覚的に示すのに対し、「狂気」《folie》は様々な劇中人物の言動やそれらがもたらす状況と結びつき、作品の内容を要約するものになっている。『葉陰の劇』は 22 の独立性の高いエピソードから構成されているが、「葉陰」とともに「狂気」は作品全体に関わる重要な主題であり、25566 写本の《le fuellie》という「タイトル」にこの二つの語のイメージが重ねられていることは間違いない。

『葉陰の劇』では通常の生活の軌道を逸脱し、あらゆる公的で聖的な価値を転倒させることが許された無礼講の状況が再現されている。異教的存在である妖精たちが年に一度、アラスの町の広場に降り立つ夜、妖精を迎える「葉陰」《feuillée》のもとでアラスの町は日常の秩序から解放され、人々は「狂気」《folie》が支配する狂騒のなかに身を委ねる。共同体の祝祭で、町に蔓延する悪徳と権威の抑圧を存分に呪い、仲間たちとはめをはずして大騒ぎすることで、共同体は内部の結束を強め、その活力をとりもどす。劇の最後の場面、町の聖ニコラ教会の鐘のともを訪れる朝の描写は、「夏の夜の夢」の祝祭のあと、キリスト教的秩序のなかの日常性の回帰の様子を示している。25566 写本の写字生が残した Li jus Adan 「アダンの劇」と《li jeux de le fuellie》「葉陰の劇」あるいは「狂気の劇」という二つのタイトルは、その多義性によって、作中に散りばめられた多様なモチーフをあまねく伝え、この作品の製作・上演が、それに関わる都市の共同体にどのような意義を持っていたかを伝えるものとなっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 片山幹生	4. 巻 27
2. 論文標題 典礼から演劇へ：典礼劇の言葉と音楽	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Etudes francaises	6. 最初と最後の頁 44-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片山幹生	4. 巻 28
2. 論文標題 タイトルに見る『葉陰の劇』の重層性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Etudes francaises	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>【講演】片山幹生「中世演劇は存在するのか？ 「遊び（jeu / play）」としての中世フランス演劇」、岸井大輔企画PLAY+日仏演劇協会共催《リブレイ》vol. 17、2020年8月19日（水）19:30-22:00。</p> <p>【講演】片山幹生「西欧演劇のあけぼの 中世典礼劇のドラマトゥルギーと音楽について」、日仏演劇協会主催、2020年10月31日（土）20時-22時。</p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------